

万の死

小川未明

青空文庫

まん
 万は 正 直 な、うらおもてのない 人間として、村の人々
 から愛されていました。小学校を終えると、じきに役場へ小
 づか
 使いとしてやとわれました。彼は、母親の手一つで大きくなり
 ましたが、その母も早く死んだので、まつたくひとりぼっちとな
 りました。こんなことが、人々の同情をそそるのでありま
 しょう。どこへいっても、きらわれることなく、日を送りました。
 「おまえさんも、早くお嫁さんをもらうのだな。」と、ひとりぼ
 ちの彼を心からあわれんで、いつてくれるものもありましたが、
 わたし
 「私には、まだそんな気持ちはありません。」と、万は、頭をふ
 りました。それには、早いからという意味ばかりではありません。

始終しじゆう不自由ふじゆうをして、貧ますしく死しんでいった母ははおや親おやのことを思おもうと、すこしの楽たのしみもさせずにしまつたのを、心こころから悔くいるためもありました。

彼かれの母ははは、じつにやさしかったのです。彼かれが父ちち親おやと早はやく別わかれたので、その不憫ふびんもあつたのですが、また、この世よの中なかに母はは一人ひとり、子一人こひとりとしてみれば、たがいにいたわりあうのが、むしろ、ほんとうの情なさけでもありました。

——ある夜よ、万まんは、灯ひの下したで学が校っこうの復ふく習しゅうをしていました。母ははは眼鏡めがねをかけて、手内職てないしよくの針はりをつづけていました。窓まどの外そとでは、雨うき氣きをふくんだ風かぜが、はげしく吹ふいています。そして、その年としの暮くれも間近まぢかに迫せまつたのでした。母ははは、なにを思おもつたか、ふい

に、万まんに話はなしかけました。

「おまえが、まだ物もの心ごころのつかないころだったよ。この村むらに、

おつるさんといって、孝行こうこうの娘むすめさんがあつた。こんなような、

暮くれにおしせまった、ある日ひのこと、できあがつた品物しなものを持つ

て町まちの間屋とんやへとどけ、お金かねをもらつて歸かえりに、そのお金かねをみんな

とられてしまったんだよ。かわいそうに、それで娘むすめさんは川かわへ身み

を投なげて死しんでしまいました。」と、母ははは語かたりました。

これを聞きくと、万まんは下したをむいて本ほんを見ていた顔かおを上げました。

「だれに、お金かねをとられたんです。ただ、それだけで死しんだので

すか。」と、問といかえしました。もつと、くわしいことが知しりた

かつたのです。

「おまえ、そのお金がなければ、家の人たちが年を越せなかったのだよ。下には、小さい弟はたくさんいたし、それに、父親は病気で寝ていたんだからね。」

「どうして、そんな大事な金を、とられたんだろな。」と、万は、不審でたまらず、頭をかしげました。

「それが、まだ若い娘さんだろう、無理はないよ。活動写真は館の前に立って、ぼんやりと写真を見ていたそのすきをねらって、すりがすったらしい。まのわるいときというものは、すべて、そういうものさ。気のついたときは、もうおそい。しかたがないから、おつるさんは、問屋へ引きかえしたんだよ。」

「かわいそうにな、問屋は貸さなかつたんでしよう。」

「そうだな。おつるさんは、はたらいで返すから、どうかお金を貸してくださいと、主人に頼んだのだよ。思いやりも、情けもない主人は、すげなく断つたのです。」

「なんといつて。」と、万は、顔を赤くしながら、こみ上がってくる感情を、押さえきれませんでした。

「あんまり、あんたは虫がよすぎる、この金の出入りのせわしい暮れに、自分の不注意から金をなくしたといつて、また貸せというのは。こちらもいそがしいので、いちいちたのみをきいていけない。なんとおつしやつても、今日はだめです、つてね。」

「困るからたのむんじゃないか！ それから、どうしたの？」

「いつまでも、家では、おつるさんが帰らないので大騒ぎとな

り、いつしか村じゆうのものが飛び出して、夜中まで方々を探したがわからなかつた。二、三日すると、死骸が川下の方へ浮かんだのだ。その当座は、みんなが、問屋の主人をわるくいわないものはなかつたよ。」と、母は、またつづけて、

「しかし、金持ちにはかなわないんだね。仕事をさせてもらわなければならぬし、いつしかぺこぺこ頭を下げていくようになったよ。」

「問屋つて、あの町の袋物屋ですか。大きい店なのに、そんな金がないわけでなし、どうしてだろうな。」と、万が聞きました。

「どうして。大金持ちだというけれど、もとは、みんな貧乏な人たちをできるだけ安く働かして、もうけた金なのだから、考

えれば、私どもは、ちつともうらやましいことはないのさ。」と、
 母親は、針を燈火に近づけて、指をはたらかしながら、いいま
 した。このとき、万の目には、涙が光っていました。

その後、万は、いくたびも町へ出て、袋物屋の前を通りまし
 た。そのたびに、この家だなど、思つて、中をのぞきました。
 たいてい、客が入つてなにか見ていました。そして、めつた
 に主人の顔を見なかつたが、あるとき、四角な顔をした、それ
 らしい男が、おうへいな言葉つきで、人と話をしていました。よ
 く注意すると、昼間から酒を飲んだとみえて、いい顔色をし
 ていました。相手を小ばかにするのは、やはり、こちらがなにか
 頼んでいるからでしょう。

万は、娘が身を投げて死んだという川にかかる橋を渡るときは、
 かならず立ちどまって、欄干によりかかり、じつと水を見て、
 考えるのであります。あるときは、寒い風が、すすり泣くように、
 川面を吹いているのでした。また、夏の晩方には、赤い雲が、
 さながら血を流すようにうつっていることもありました。彼は、
 母から聞いた、おつるさんという不幸な娘のことを思い出したの
 でしよう。

「なにより、命が大事なんじゃないか。死ななければよかったの
 に。だが、おれは、まだ小さくて、なんにもできなかつたのだ。」
 と、ひとりごとをするのでした。

このとき、彼が、どんなことを考えていたか、だれも知るもの

はありません。生まれつき、無口の万は、思つたこと、考えたことを、めつたに、他に話しません。役場へ勤めてからも、まじめ**ほう**はたら**たら**一方に働くばかりでした。しかし、なにか、うまいものが彼の**か**れ**て**手**て**に入ると、だれの**まえ**もは**はい**ばからず、きつと、

「こんなものを、母**か**あさんに食**た**べさせてやりたかつたなあ。」と、
いうのでした。そして、ところを**わす**れて、母子が、さびしくま**ま**ずしく暮**く**らしたころのことを目**め**に浮**う**かべるのでした。また、なにかおもしろいもおしでもあるときは、

「こんなのを、母**か**あさんに見**み**せてやりたかつたなあ。」と、かならず**こ**いうのでした。そして、すこしのたのしみも知**し**らず、一人**ひとり**の子**こ**供**ども**のために、はたらきつづけた、みじめなやもめを**おも**い出**だ**すので

した。けれど、それさえ、彼は口に出さなかつたから、彼が、どれほどの正直者であるか、知るものがなかつたのです。

彼は、日常、役場に泊まつたり、自分の破れ家に帰つたりしていました。

ところが、いつからとなく妙なうわさが村の中にひろまりました。それは日ごろから万の生活を知り、彼を正直な人間と思つていた人々にとつて、意外に腑に落ちぬことだったので

「万は、ひとり者だから、給料だけで、足りぬはずはないのだがな。」と、一人が思案顔をしていうと、

「早く嫁を持たすのがいいのだ。ひとりでいれば、どうしても遊

びにいくだろうから。」と、一人ひとりが答こたえました。

「だが、あの男おとこにかぎって、そんなようには見みえないが、金かねをためていいるのかな。」

「ほかから借かりてまで金かねをためることはしまいが、なにしろ若わかいものだもの、遊あそびにいくかもしれない。」

こんな話はなしを、道みちの上うえで立たちながらするものもありました。そう思おもうと、またべつの人ひとたちは、

「どうも、このごろの方まんはおかしい。はつきりとはいえぬが、ばくちをするんでないかな。」と、一人ひとりが、分ぶん別べつありげに頭あたまをかしげると、

「いや、あの堅かたい男おとこにかぎって、ばくちはしまい。それにしても

おかしいことだ。もうちつと、だまつてようすを見てみよう。」

「おまえさんのところから、いくら借りたんだね。」

「なに、たいした金でない。それだけおかしいのさ。返そうと思えば、いつだつて返せるのを……。」

こうして、万について話をする人たちは、いずれも村で金のあ
る地主とか、物持ちとして知られてる人々でした。これを見て
も、万は、金を借りるのに、金のありそうな人たちだけをねらつ
たものとみえました。このことは、その日その日を働いて暮らさ
なければならぬものには、どういう事情があつても、万は、無
心をたのむ気になれなかつたのでしよう。それであるから、万は、
だんだん金持ちからきらわれるようになったのもしかたがありません

せん。しかし、彼の勤勉な生活ぶりは、だれの目にも、いままでと変わったとは見えませんでした。

その日も、万は役場から帰ると、すぐ山へたきぎを取りに出かけました。うす寒い、雨もよいの日で、彼は暗くなってから、雨にぬれながら、重い荷を負つて家へもどりました。このとき、冷えたものか、かぜをひいたのです。その夜から、急激に熱が高くなつて、医者にもかかつたけれど、ついに悪性の肺炎を起こし、近所の人々が看護をしてくれたかいもなく、とうとう、死んでしまいました。

万の葬式は、わずかに彼を知る村の人々だけで、さびしくおこなわれました。当日、柩が村を出て、山麓の墓地へさし

かかろうとすると、このとき、どこからあらわれ出たものか、たくさんの乞食や、浮浪児が列をつくつて、柩の後についてきたので、一同がびつくりしました。年の若い、元気な役場のものが、
「今日はおまえたちに、ほどこすものなんかないんだ。」といひました。すると、その中の年よりの乞食が、
「そんなつもりではありません。お弔いにきたんです。」と、答へました。

これを聞くと、役場のものはじめ、村の人たちは、不思議な気がして、急には、なつとくできなかつたのです。

「なぜ、わざわざ、こんなにしてやつてくるのだ。」と、ひげをはやした書記が、いちばん先にいた宿なし少年にたずねまし

た。

「だって、死んだおじさんは、おれたちに、やさしい、いいおじさんだったもの。」と、少年は答えました。

「ほほう、どんなふうにやさしかったのか。」

この書記ばかりでなく、一同が、意外の返事に、おどろいて、少年を見ずにいられませんでした。

「おれたち、もらいがなくて帰れば、親方にしかられるだろう。そんなとき、おじさんに頼むと、お金をくれたんだ。」

「おらあ、三日も飯食わんとき、助けてもらったんだ。」と、別の少年がいました。そして、ここにいるものはみんな方にめぐみをうけたものばかりだということがわかりました。

それは、長い間、なぞであつた万の、金持ちから借金する理由が、これらの人たちに施すためのものであつたことを知らせたのであります。

松林の中に、万は、母親と並べて葬られました。その土色のまだ新しい墓の前には、日ごとに、だれがあげるものか、

いつもいきいきとした野草の花や、山草が手向けられていまし

た。また、月の明るい晩など、このあたりから起こる笛の音は、万の靈魂をなぐさめるものと思われました。そして、村人の

耳に、切々として、悲しいしらべを送るのでした。心ある人は、

人間の一生というものを考えました。

彼の本名は、万三とか、万蔵とかいったのであるが、

村^{むら}の人々^{ひとびと}には、万^{まん}で、通^{とお}っていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「新児童文化 第4冊」

1949（昭和24）年11月

※表題は底本では、「万《まん》の死《し》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

万の死

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>